

## 2020 年度言語聴覚士国家試験対策報告 小児関連領域の資料集作成とその活用

著者	水谷 八千代
雑誌名	京都光華女子大学京都光華女子大学短期大学部研究 紀要
号	59
ページ	177-189
発行年	2022-03-01
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1108/00001061/">http://id.nii.ac.jp/1108/00001061/</a>

# 2020 年度言語聴覚士国家試験対策報告

## 小児関連領域の資料集作成とその活用

水谷 八千代

キーワード 言語聴覚士国家試験 国家試験出題基準  
国家試験対策

### 要旨

言語聴覚士国家試験の小児関連領域について独自の資料集を作成した。資料集を中核とする国家試験対策を実施したので報告する。

第 23 回国家試験終了後、出題キーワードの資料集記載率を調べ、資料の有効性を明らかにした。また、受験生の問題正答率と資料集記載率および国家試験対策内容との関連性を考察し、国家試験対策の有効性を検証した。

検証の結果、資料集該当範囲の学生正答率は他領域正答率に比して低く、国家試験対策は有効ではないことが判明した。資料集は国家試験の出題内容を網羅していた。しかし、キーワードが異なる出題領域にわたる問題で特に正答率が低かった。また、作成問題量が少なく、学生に最新の出題傾向に沿った問題に接する機会を十分には提供していないことがわかった。

今後の課題として出題傾向に沿った作成問題を準備し、補習で活用していくことが検討される。

### I. はじめに

言語聴覚士は 1999 年に第一回国家試験が実施された、比較的新しい国家資格である。国家試験の出題範囲は「言語聴覚士 国家試験出題基準」によって定められている。この「言語聴覚士 国家試験出題基準」は、医学・医療および学説などの進歩に対応するべく、数年おきに見直しが行われている。現在の出題基準は 2018 年に 4 月に改訂されたものである。出題範囲は、13 の領域に分けられ、その内容は I 基礎医学、II 臨床医学、III 臨床歯科学、IV 音声・言語・聴覚医学、V 心理学、VI 音声・言語学、VII 社会福祉・教育、VIII 言語

聴覚障害学総論、IX 失語症、X、高次脳機能障害、XI 言語発達障害学、XII 発声発語・嚥下障害学、XIII 聴覚障害学と幅広い。13 の領域はさらに大項目、中項目、小項目と詳細な分類がなされている。200 問が出題され、200 点満点とし、120 点以上を合格とする。

言語聴覚士国家試験対策については業者による模擬試験や対策講座も限られる。業者による模擬試験は 2019 年から開始されたばかりである。対策講座を外注する先もない。そのため、養成校による独自の国家試験対策が重要な役割を果たす。

一方、本学の医療福祉学科言語聴覚専攻に入学する学生の基礎学力はさまざまである。自習だけで国家試験合格が可能な学生もいるが、少数である。多くは教員主導の種々の国家試験対策を必要とする学生である。そして、臨床のセンスが高く実習場面の評価は高いが、座学での勉強は不得意で、国家試験には非常に苦勞する学生が一定数いる。この、「勉強は得意ではないが、臨床センスがある学生」を合格に導くことは大学教員の役割の一つであると考えられる。

筆者は 2018 年より本学の国家試験における小児領域として、V 心理学領域の大項目 4 生涯発達心理学、VI 音声・言語学領域の大項目 5 言語発達学、XII 言語発達障害学領域全般、XIII 発声発語障害学・嚥下障害学領域の大項目 2 構音障害、中項目 C 機能性構音障害および D 器質性構音障害の一部を担当範囲としている。

言語聴覚士国家試験の教科書としては「ST テキスト第 3 版」が広く知られている。序文に、「言語聴覚士を目指す学生に必要な項目について『言語聴覚士国家試験出題基準』をもとに網羅」とあり、国家試験対策全般のベーシックな教科書である。また、一年次からの使用教科書としては小児関連領域だけで 4 冊の書籍がある。学習範囲が一冊に凝縮されている ST テキストは、概要をおさえるという位置付けである。教科書は詳しく記載されているが、国家試験対策としては 10 冊以上の書籍を使い分けることとなる。また、国

家試験には出題されない情報も多く含む。

学生には、学習すべき内容がある程度絞ってわかりやすい状態で提示することが必要だと考えた。そこで、STテキストと、教科書類の中間の情報量で、国家試験対策に特化したオリジナル資料集（以下、資料集）の必要を感じた。資料集の作成は数年にわたり改訂を重ねてきた。2020年度における資料集の作成と、それを中心とした国家試験対策について報告する。

## Ⅱ. 資料の作成

### 1 国家試験出題分類（以下、出題分類）の作成

適切な資料集を作成するためには、国家試験の出題傾向を把握する必要がある。そこで、過去の国家試験すべての問題について、キーワードを抽出し、言語聴覚士国家試験出題基準に従って分類した。言語聴覚士国家試験出題基準では13の領域について大項目、中

項目、小項目までが明記されている。小項目以降の分類については主にSTテキストの記述を参考にした。頻回に出題されるキーワードは、いくつかの下位グループを含んだ階層構造を形成した。一方、出題基準には項目があってもほぼ出題されていないものもあることがわかった。表1は出題分類の抜粋で、XI言語発達障害学領域の大項目3指導中項目障害別指導小項目a自閉症スペクトラム障害の一部分である。5桁の数字は国家試験実施回と問題番号を示す。14-073とは14回国家試験の73番の問題である。自閉症スペクトラム障害児に対する指導については初期には出題されておらず、6回145番を初出とする。指導の1つである「予告し、見通しをつけること」は高頻度で出題され、その中でも、「行先を写真や文字で予告する」は9回、14回、21回と三度にわたって使用されていることもわかる。

出題分類は出題傾向を明確にするものであり、出題

表1 出題分類抜粋

XI言語発達障害学領域	大項目3指導	中項目B障害別指導	小項目a自閉症スペクトラム障害
14-073 予告/見通し	見通しにおける視覚支援	08-141	予定をスケジュールに書いておく
		20-164	スケジュールを視覚的に示す
		06-145	作業や日常動作の手順を具体的に図示する
		07-143	指導内容と順番を文字で示す
		09-143 14-073 21-073	行先を写真や文字で予告する
		12-170	ロゴやマークによる予告
		14-073	外出の前に行き先の写真をみせる
		14-073	遠足のしおりに写真や絵を入れる
		09-143	ゲームのルールを箇条書きで伝える
		予定変更	09-143 21-073
23-071	1日の活動の見通しが立つようにする		
06-145	スケジュールの変更をカレンダーで示す		
新奇場面の対応	08-141	新しい場面に参加させるには事前に状況を説明する	
	14-073	疲れていることをジェスチャーで表現させる	
	14-073	楽しい気持ちをマークや絵文字で表現させる	
	20-165	要求などを出しやすい機会を設定する	
意思表出場面の設定	23-071	拒否を表現できる手段を指導	
	23-071	拒否を表現できる手段を指導	
会話における配慮	会話における視覚支援	08-141	絵や文字などを併用して言語指示を出す
		19-173	実物やイラストを用いて分かりやすく伝える
		19-173	指さして答えられるよう絵や写真を用意
	19-173	マイクを持つなどして会話が一方的にならないよう	
	09-143 19-173	質問嗜好に毎回応じる必要はない	
19-173	子どもの興味・関心に沿った話題を提供		
言語指示の支援	21-073	「～してはいけない」ではなく「～しなさい」と教える	
	21-073	「ちょっと待って」ではなく「～時まで待って」と伝える	

(筆者作成)

頻度も把握できる。しかし、学生にとってわかりやすいとはいえない。あくまでも資料集作成の基盤と考えた。

## 2 資料集の作成

出題分類を元に資料集を作成した。資料集とは、出題分類上に記載されたキーワードについての解説を集めたものである。説明、解説文はSTテキストおよび教科書より引用した。説明、解説の一部を空欄にし、学生がその部分を調べて記入するようにした。どの書籍の何ページを読めば、該当する語彙をみつけられるかを明確にし、学生の独学を可能にした。資料集はこれまでの学生リクエストに応じて変更を重ね、また新しい国家試験問題の情報を取り入れることを積み重ねてきた。2020 年度版資料集は A4 サイズで 164 ページとなった。

図 1 は資料集の抜粋である。空欄になっている部分は、学生が調べて適切な語句を入れる。2019 年に「時間経過による変化を一覧できる図解が欲しい」との学生リクエストにより、右下のグラフを追加した。イラ

ストやグラフは補習や模擬試験解説で使用するスライドである。

## 3 問題集の作成

過去問題集とは、回数別と領域別の二つの形式の問題集を用意した。回数別の過去問題集とは、過去に実施された国家試験問題そのものである。

領域別の過去問題集とは、出題分類にもとづき、中項目から小項目の単位で同じ項目に所属すると思われる問題をまとめたものである。領域別問題は、A4 用紙 1 枚に最大 8 問までとし、学生が「問題を全部やりきった」という達成感を持ちやすくした。図 2 はその一例で、表 1 と同じく XI 言語発達障害学領域大項目 3 指導中項目 B 障害別指導 a 自閉症スペクトラム障害の問題をまとめたものである。同じ内容について繰り返し出題されていることや、類似した問題が数年おきに出題されていることもわかる。過去問題は 1 回からのすべての問題を確認した上で、現在は廃版になっている検査が含まれた問題など、あきらかに古い情報は適宜変更し、改変の旨を明記した。

V 言語学音声学 5 言語発達学 C 1～2 歳の言語発達 a 語彙の増加 【☆A-1 標準言語聴覚障害学 言語発達障害学第 2 版 p.57】		061
3) 語彙獲得期 第 2 段階 - 急激に増加する時期		
時期	自発的に産出できることばが 50 語くらいを超えた時期以降	
特徴	「命名の洞察」、「即時マッピング」、「制約理論」、「社会-語用的理論」の語彙獲得を効率化する理論に支えられて vocabularyspurt (語彙 <input type="text"/> 的 <input type="text"/> 語彙爆発) が生じる。	
語彙の爆発的増加	語彙の加速度的増加・語彙の爆発 vocabularyspurt とも言う。表出語彙が急激に増加すること。	
品詞	この時期に増えるのは一般的 <b>事物</b> <input type="text"/> である	
汎用の減少	語彙の加速度的増加が生じると、過大汎用、過小汎用されていた語は、適切なカテゴリーを指示する新しい語を獲得するとともに使用範囲 <input type="text"/> いく。【☆A-1 標準言語聴覚障害学 言語発達障害学第 2 版 p.57】	


  

3) -① 語彙獲得を効率化する理論 「 <input type="text"/> の洞察」 (naming insight)	
定義	子どもが <input type="text"/> にはすべて <input type="text"/> がある」と気づくこと
行動	「物を指さしてしきりに「コレ?」「ナニ?」などと言って大人に対して命名を求めたり、自ら命名をする。真に名称を知りたい場合もあるが、大人とのコミュニケーションを楽しむ目的で行われることもある。
効用	語彙の急激な増加を促す
時期	定型発達では 1 歳 6 か月ごろ

3) -② 語彙獲得を効率化する理論 「即時 <input type="text"/> 」 (fast mapping)	
定義	一度、語がつかわれるのを見ただけで <input type="text"/> にその語を正しく概念と対応付けすること。語と対応する概念を対応付けることをマッピングと言うことから、上記の状態を指して即時マッピングと命名された。
時期	定型発達では 1 歳 6 か月ごろであり、命名の洞察と同時期に生じる



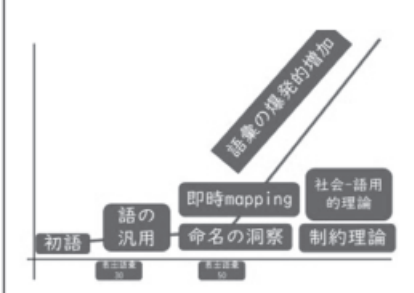


図 1 資料集抜粋

(筆者作成)

XI 言語発達障害 指導・支援⑩ 障害別 ASD	
<p>08-141 自閉症の指導として優先順位が低いのはどれか a. 1日の予定をスケジュール表に書いておく b. 絵や文字などを併用して言語指示を出す c. 特定の場面でことばを繰り返し練習させる d. 遊びの最中にことばかけをする e. 新しい場面に参加させる時は事前に状況を説明する 1 a b    2 a e    3 b c    4 c d    5 d e</p>	<p>19-173 自閉症スペクトラム障害児との会話における配慮について適切でないのはどれか 1 指さしで答えられるように絵や写真などを用意する 2 話し手が順番にマイクを持つなど会話が一方的にならないようにする 3 実物やイラストを用いて質問の意図が分かりやすいようにする 4 同じ質問を繰り返す場合はその都度答えるようにする 5 子どもの興味・関心に沿った話題を提供する</p>
<p>12-170 自閉症児の指導として適切なのはどれか a 理解できるロゴマークによる予告を促す b 色に興味があれば動作語よりは色名を先に導入する c 反響言語（エコラリア）は制止する d 身振りの使用を制限する e 興味のある絵本を積極的に見せる 1. a・b・c    2. a・b・e    3. a・d・e 4. b・c・d    5. c・d・e</p>	<p>20-072 自閉症スペクトラム障害児に対するコミュニケーション機能の学習を促通する方法で誤っているのはどれか 1. 早期から他者への関心を育てる 2. 模倣行動から自発行動へ促す 3. 快や不快の感情を経験させる 4. 集団場面での行動を分析する 5. 文字や絵を手がかりにする</p>
<p>14-073 自閉症児の指導として適切でないのはどれか 1 外出の前に行先の写真を見せる 2 パニックを起こしても最後まで実行させる 3 楽しい気持ちをマークや文字で表現させる 4 遠足のしおりに写真や絵を入れる 5 疲れていることをジェスチャーで表現させる</p>	<p>21-073 自閉症スペクトラム障害児への指導として適切でないのはどれか 1. 行先を写真や文字で知らせる 2. 「～してはいけない」ではなく「～しなさい」と教える 3. 「ちょっと待って」ではなく「～時まで待って」と伝える 4. 「相手の気持ちになってみて」と促す 5. 予定の変更は事前に知らせる</p>
	<p>22-071 自閉症スペクトラム児へのコミュニケーション支援として適切なのはどれか a. 間接的表現を多用し話しかける b. 興味の持てない活動にも積極的なかわりの機会を作る c. 言語発達の遅れない子供には絵や写真などを使用しないようにする d. 遊びに参加したくないときの適切な断り方をロールプレイで教える e. 困った時に援助を求める場面を設定して具体的に教える 1. a、b    2. a、e    3. b、c    4. c、d    5. d、e</p>

図2 問題集 領域別過去問題集 抜粋

(筆者作成)

作成問題とは、出題基準を参考にして筆者がつくったオリジナル問題である。

#### 4 副教材の作成

「かるた」「パズル」などの副教材は学生とのやりとりの中で自然発生的に生まれてきた。学生の「楽しんで暗記の勉強がしたい」などのリクエストに応え、筆

者が原案を出し、実際の作成を学生が行ったものが多い。「かるた」はキーワードと解説を読み札と取り札にしたものである。「パズル」はキーワードと解説を対応させて完成させるものである。

「かるた」と「パズル」はコモンズに置き、学生が使いたいと思うときに、すぐ使えるようにした。



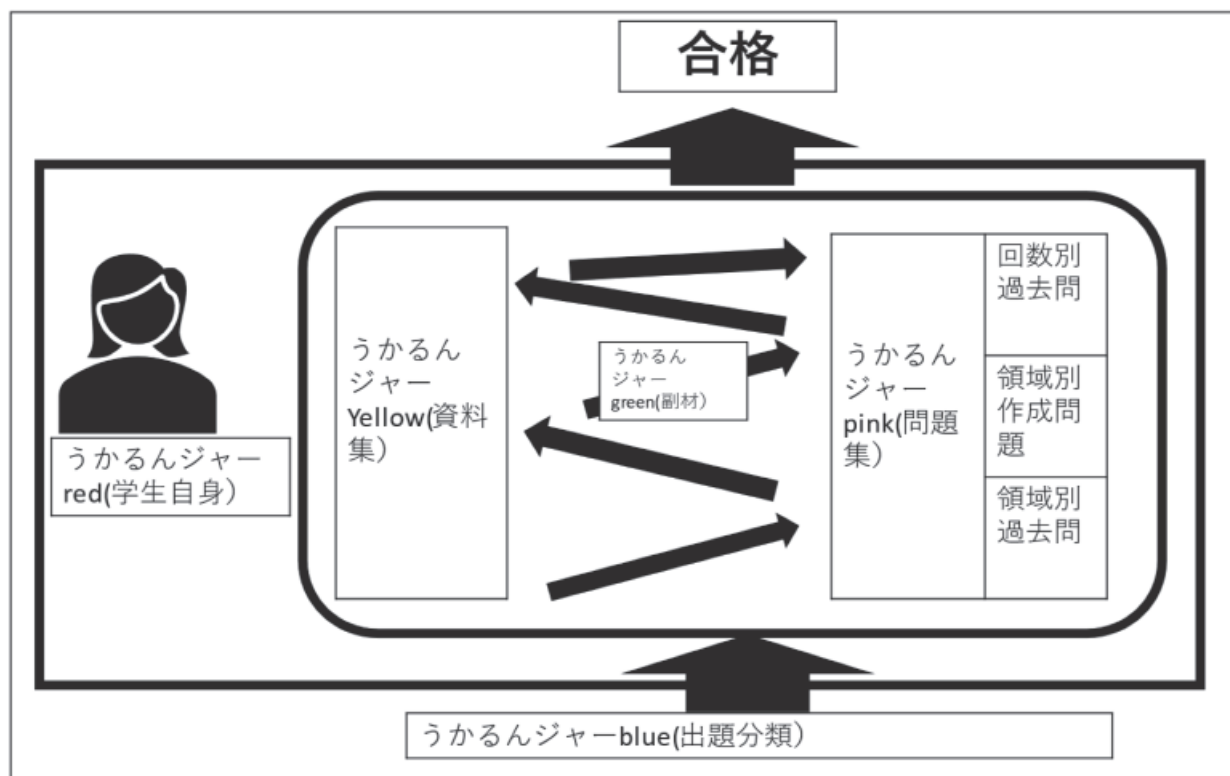


図3 うかるんジャー 5 全体像図解

(筆者作成)

## 5 作成資料の全体構成

作成資料を中心とした指導の全体構成は図3の通りである。

出題分類がすべての基底にあると考えた。出題分類を参考に、資料集と問題集を作成する。問題集の領域別過去問は出題分類を参考に構成した。問題集は、領域別過去問、回数別過去問、領域別作成問題の三種類がある。問題の実施順序は、領域別過去問から開始し、その後、回数別過去問、作成問題が加わっていく。資料集で学んでから問題集で実力を確認する。問題を解いて不確かなことは資料集にもどって確認するので、資料集と問題集の間は矢印が往來する。合間に副教材を使ってゲーム形式で学ぶこともある。これらを使いこなす主体は一人一人の学生である。

「合格」を勝ち取って欲しいとの思いを込めて、「うかるんジャー」の名前を冠して、それぞれに命名した。

出題分類をうかるんジャー blue、資料集をうかるんジャー yellow、問題集をうかるんジャー pink、副教材をうかるんジャー green とした。そしてこれらを主体的に使用する学生自身はうかるんジャー red である。red、blue、yellow、pink、green でうかるんジャー

5とした。

## Ⅲ 導入及び指導

### 1 資料集の配布と学生による記入 (5 - 7月)

2020年5月、国家試験受験予定の学生に資料集を郵送した。初めての緊急事態宣言が発出中であり、学生は原則として大学への入構禁止、地元へ帰省したままの学生も多い時期であった。

郵送と同時に学生には空欄のキーワード記入を課した。STテキストと教科書があれば、自宅でも行える内容である。学生が質問してきた内容は光華 Navi の掲示板で全員に正解を伝え、共有した。顔をあわせて会話することがない環境の中では、ちょっとしたことで学習につまずく学生も多いだろうと予想した。学生が努力して答えを探し出すことを期待するより、答えを提示することで学生の学習が継続することを重視した。

キーワード記入課題を行う Zoom 補習も実施した。事前に課題の進捗を学生に報告させ、Zoom のブレイクアウトルーム機能を用いて進捗度別のグループを作成した。4~5人のグループでそれぞれ画面共有をしな

から課題を行った。補習中、筆者は各グループを巡回したが、キーワード記入がすすんでいないグループに介入することが多かった。記入がすすんでいるグループは自発的にヘルプボタンを押し、筆者を呼び、質問をしてくるなど、機能をうまく使いこなしていた。

グループ学習形式にすれば、誰かの解答を他のメンバーが丸写しすることは予想されたが、それも学習の一端をなすと考え、許容した。突然大学に入れなくなってしまい、同級生の顔をみて話す機会もなくなった学生が、雑談をしても良いし、他の学生の勉強具合を知るのも良いと思ったからである。筆者自身もブレイクアウトルーム機能でグループの部屋に入った瞬間に学生の談笑が聞こえてくると、教室に入ったかのような錯覚を覚えた。

## 2 資料集を用いた解説と過去問補習 (9 - 11 月)

校内実習終了後、資料集のページにのっとって補習を開始した。まずは、キーワード記入の確認を行った。補習の形態は Zoom によるリアルタイム方式が主である。確認後、解説を行った。1年生の授業以来となる内容も含まれるため、一通りの解説は必要と考えて行った。

その後、問題集の領域別過去問題集から該当する問題をいくつか選び、実施した。この時点では資料集の該当ページを見つけ出し、その解説を読みながら正答を見つけられれば良しとした。資料集のどこに何が書かれているのかを把握する段階でもあった。

領域別過去問題集は光華 navi にアップし、学生が自由に印刷して解けるようにした。一部を小テスト機能に入れ、国家試験の当日まで複数回解けるようにセッティングした。また、領域別過去問を印刷したものをコモンズにストックし、学生が自由に使えるようにした。しかし、この時期は登校日が限られ、十分には使用されなかった。それでも、定期的に問題のストックを見ると減ってはいて、学生なりに領域別問題集を活用していたようである。模擬試験や対面補習でたまに大学に来た学生が領域別過去問題をまとめて持っていく姿がたびたび見受けられた。

## 3 過去問題演習 (10 月 - 2 月)

領域別過去問のすべてを順次解いていく時期である。事前に宿題として該当問題を配布する。資料集を

しっかり調べて解くよう伝えた。

補習では、学生が資料集を参照して過去問題解説を行う方式とした。初期の解説は成績上位学生を指名し、ある程度説明の手本を示してもらった後、成績別の3班に分かれた補習とした。当専攻の国家試験対策では、例年9月下旬より、成績別補習が実施される。成績上位からA,B,C班に分類され、模擬試験の成績によって班はその都度新しく編成される。過去問の解説は、上位のA班だけでなく、B,C班もうまくできる場面が増えていった。

ただし、作成問題を中心とした補習は12月ごろから取り掛かったため、実施回数に限られており、国家試験終了時には、実施できなかった作成問題が大量に残った。

問題集の回数別過去問は11月ごろから解禁した。回数別は13領域すべてにわたる問題が次々と200問の出題される形式である。同じ問題でも出題順序が変わると解けないので、知識を定着させなければならない。このため、回数別は領域別をやり終えてからと考え、開始時期を遅らせた。

感染拡大防止のため、学内に学生が集まることが少なかった2020年度は、副教材の「カルタ」や「パズル」を行う機会は例年にくらべて少なかった。「カルタ」はC班の補習の際に使用した。「カルタ」をやった直後にそれに相応する領域別過去問を解くなどし、学生が成功経験をもつことができるよう活用した。

## 4 他校合同補習 (11 月 ~ 2 月)

2019年度は、某専門学校の言語聴覚養成課程の学生を招き、京都光華女子大学で合同模試を行った。共学校の学生と会場を同じくして行う模擬試験は、女子大学では作りえない非日常場面となった。実際の国家試験会場の雰囲気に近いものがつくりだせたように思う。しかし、2020年度は感染拡大防止の観点から合同模試は行えなかった。代替案として、同校との合同補習を行った。

Zoomを利用して、各校3人の学生、合計6名を1グループとした。内容は、筆者があらかじめ出していた作成問題を解説するというものである。筆者は、大学の許可を得て、同校で非常勤講師として国家試験対策の授業を行っており、そこでも資料集を使用している。そのため、両校で資料集を共有して勉強会を行っ

た。両校それぞれ成績順に3人程度を指名し、週1回40分程度で、全10回行った。どうしても参加したくないという学生には強制しなかった。初回、三田校の学生が発表スライドを自作してきたのが、当校の学生には新鮮だったようである。翌回以降の学生は念入りに予習、打ち合わせ、役割分担を行って準備するようになった。「同じ相手ともう一回勉強会を行いたい」と希望する学生も多かった。相手校に論破される形になった回は「悔しい」「今度はもっと調べる」などの声が聞かれた。

## 5 直前指導 (1月－2月)

すべての領域別過去問を終了した時期である。回数別過去問を解き、学生自身が自分の弱点や苦手な気づく、それに相応する領域別過去問にもどってやりなおすよう指導した。また、週1回、作成問題30問程度を課題とし、その後、Zoomで全員に解説を行った。出題傾向の説明のために、出題分類の一部を学生に開示することもあった。B、C班は別途対面補習を行った。

## IV 導入および実施効果の検証

2021年2月20日、第23回国家試験が終了した。国家試験問題出題内容が資料集に記載されていたか、学生の自己採点結果と資料集の記載の関連性、またSTテキスト、教科書の記載内容と国家試験問題の一致度を分析した。これにより、資料集は国家試験に出題された内容を網羅できていたか、国家試験対策は効果をあげたかの検証を行った。

### 1 検証対象と方法

#### (1) 検証対象

検証対象とする領域を限定した。出題内容の記載については、資料集とSTテキスト、および教科書の3種を比較するが、小児に関連する領域の教科書は4冊となり、内容の重複も認められる。そのため、標準言語聴覚障害学言語発達障害学(以下、言語発達障害学教科書)が対象となる領域のみを検証対象に限定した。これにより、検証対象とするのは小児関連37問のうち、XI言語発達障害学領域のみの20問とした。

次に、23回国家試験の問題文および解答選択肢か

ら、解答に必要な文、および句を抽出した。出題問題の用語のみではなく、文あるいは句を単位として分析対象と考えた。たとえば、「<S-S法>言語発達遅滞検査」という検査名称は、言語聴覚専攻の学生であれば低学年でも知っている。しかし、「<S-S法>言語発達遅滞検査の適用年齢」、「<S-S法>言語発達遅滞検査の3側面とは、記号形式指示内容関係・基礎的プロセス・コミュニケーション態度である」のように句および文にした場合は、深い知識を持っていなければわからない。国家試験を受験するに足る知識とは、キーワードを含んだ文や句を理解し、説明できるものであると考えた。そこで、出題問題の用語を「キーセンテンス」とした。

さらに、正解を選ぶための決め手となったキーセンテンスを選択した。「正しいものを選び」という設問であれば、正解選択肢のキーセンテンスを理解し選ぶことができれば、それ以外の選択肢は正誤にはかわりを持たない。このようなキーセンテンスを「正誤にかかわるキーセンテンス」とした。解答を複数選ぶ問題ではキーセンテンスは2つとなった。

キーセンテンスが資料集、STテキスト、教科書に記載されているかを調べた。その中で「正誤にかかわるキーセンテンス」のみを抽出し、再記載した。

正誤にかかわるキーセンテンスが含まれた過去問、および作成問題を補習で実施したかも明記した。

#### (2) 検証方法

受験生34人から自己採点結果が得られた。これにより、学生の各問題の正誤、総得点、選択肢別解答率などの情報が得られた。これらの情報を収集した後、受験生の平均正答率順に問題を整理した。

### 2 平均正答率分布

図4はXI言語発達障害学領域20問について、受験生の平均正答率別問題数の分布を示したものである。4つの群ができています。上から正答率85%以上の第1群、空白地帯があり、60%以上75%未満の第2群、空白地帯、40%以上55%未満の第3群、空白地帯、35%未満の第4群と、4つである。

そこで、4つの群にわけた上で、キーセンテンスおよび正誤にかかわるキーセンテンスの記載率、実施問題数を一覧表にまとめた。



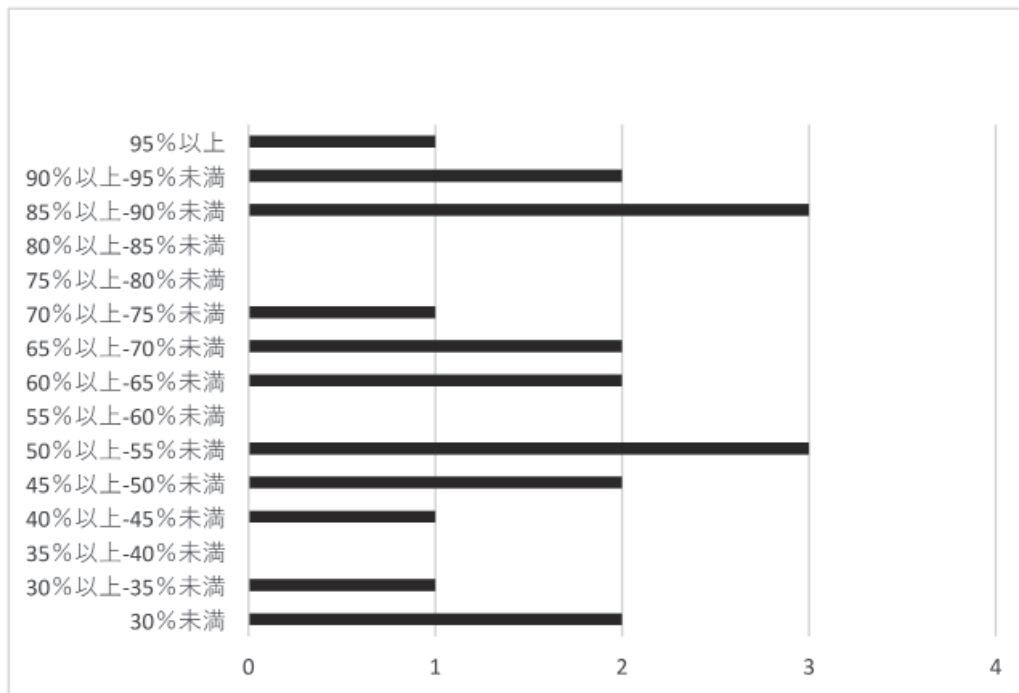


図4 正答率別問題数

(筆者作成)

### 3 4群比較表による検証

表2は総合一覧表である。対象となったXI言語発達障害学領域の20問について、問題番号、大項目分類、自己採点平均正答率、資料集・STテキスト・言語発達障害学教科書のキーセンテンスおよび正誤にかかわるキーセンテンスの記載率、過去問作成問題中の正誤にかかわるキーセンテンスの存在をまとめた。問題は正答率順に並べ、4つの群で分けた。

この一覧表を元に、4群ごとにまとめたものが表3の4群比較表である。

第1群は正答率85%以上の問題群である。資料集、言語発達障害学教科書における記載率は他の群と比べてかならずしも高くはない。記載するまでもない一般的な知識や、正解がわかりやすく、他の選択肢を選びようがない問題なども含まれるためである。

第2群は正答率60%以上75%未満の問題群である。第1群と第2群の間には空白地帯があり、75%以上85%未満の正答率であった問題は1問もない。第2群では資料集の記載率はキーセンテンスでは教科書よりも高い。しかし、正誤にかかわるキーセンテンスとなると、言語発達障害学教科書は8割に達しており、非常に高い記載率を示す。

第3群は正答率40%以上55%未満である。半数前後の学生が誤っていることとなり、改善が望まれる群である。キーセンテンスの記載率は非常に高い。資料集にはキーセンテンスは76%が記載されており、正誤にかかわるキーセンテンスは87,5%記載されている。これは、資料集がある程度の情報を載せていることがわかると同時に、資料集に載っているだけでは正答率も合格率も上がらないということを示す。

第4群は正答率が35%未満となる。該当するのは3問である。うち、168番と170番は過去に類似問題のない、新しい問題と考えられる。

しかし、165番はこれにあてはまらず、資料集に記載あり、正誤にかかわるキーセンテンスを含む過去問題もある。繰り返し勉強した内容であり、出題されるだろうと予想された範囲の問題でありながら、このように低い平均正答率にとどまったのは残念である。また、この問題に関する対策に不十分な点があったことが示唆される。

すべての群を通じて、正誤にかかわるキーセンテンスを含む作成問題が少ない。作成問題が正誤にかかわるキーセンテンスにヒットしにくかったのかもしれないが、そもそも実施した問題数が過去問に比べれば少ない。これは、過去問を終えるのに時間がかかり、作成問題に着手した時期が12月と遅かったためである。

表2 総合一覧表

	問題 番号	大項目 分類	平均 正答率	キーセンテンスの記載率			正誤にかかわるキーセンテンスの記載率					キーセンテンス		
				資料集	ST テキスト	教科書	資料集	ST テキスト	教科書	過去問	作成			
1 群	各 問 題	71	指導	97,1	6/10	2/10	7/10	0/1	0/1	0/1	1 (21-073)	1	自閉症スペクトラム障害児は要求に比して叙述がの表出が困難	
		173	評価	94,3	5/5	4/5	4/5	1/1	1/1	1/1	1 (18-070)	1	WISC- IV の適用年齢は 5 歳 ~16 歳 11 か月	
		166	総論	91,4	5/5	0/5	5/5	1/1	0/1	1/1	0	0 (2 作成 実施 せず)	0	課題や活動に必要なものをなくしてしまうのは不注意症状である
		69	総論	88,6	1/5	3/5	1/5	1/1	1/1	0/1	2 (14-168 20-068)	0	じゃんけんの理解は 4 歳	
		74	指導	88,6	0/6	0/6	0/6	0/1	0/1	0/1	0	0	多職種連携では ST の専門用語の使用は慎重に	
		169	評価	85,7	6/6	5/6	6/6	1/1	1/1	1/1	0	0	LC スケールには談話能力をみる下位検査がある	
小計	6 問		90,9%	23/37 (62%)	14/37 (37%)	23/37 (62%)	4/6 (66%)	3/6 (50%)	3/6 (50%)	4	2			
2 群	各 問 題	73	指導	74,3	1/6	0/6	3/6	0/1	0/1	1/1	0	0	均衡を失した又は過度の負担を課さないものをいう	
		67	総論	68,6	4/5	0/5	4/5	1/1	0/1	1/1	0	0	SLI に LD と ADHD の併存が多い	
		68	評価	68,6	5/5	2/5	5/5	1/1	1/1	1/1	2 (12-069 19-168)	0	<S-S 法> 言語発達遅滞検査は 6 歳までであり、文字の検査を含まない	
		65	評価	62,9	7/7	2/7	2/7	1/1	0/1	0/1	2 (18-146 21-167)	0	初歩的な会話は 2 歳台から可能	
		66	総論	60,0	4/5	1/5	5/5	0/1	0/1	1/1	0	0	疑問詞獲得を時期別に 3 段階で分類すると「いつ」は最も遅い部類に属す	
小計	5 問		66,9%	21/28 (75%)	5/28 (17.8%)	19/28 (67,9%)	3/5 (60%)	1/5 (20%)	4/5 (80%)	4	0			
3 群	各 問 題	72	指導	54,3	6/6	6/6	6/6	1/1	1/1	1/1	0	2	INREAL の基本姿勢を SOUL という	
		167	評価	54,3	5/6	4/6	4/6	1/1	1/1	0/1	1 (18-070)	0	特異的言語発達障害は知的障害、自閉性、聴覚障害などがみとめられないのに言葉の発達が遅れる	

3群		171	指導	54,3	5/6	0/6	5/6	2/2	0/2	2/2	2 (21-069 22-073)	1	事物の基礎概念の獲得は段階2である 事物名称の受信は段階3-2である
		164	総論	48,6	5/5	0/5	5/5	2/2	0/2	2/2	2 (13-046 15-146)	0 (1 作成 実施 せず)	初期の語彙獲得期の言語発達は緩やかである ボキャブラリー・スパートの時期に増加するのは名詞
		172	指導	45,7	5/5	5/5	5/5	1/1	1/1	1/1	0	0	言語表出が9か月レベルであれば、次の獲得目標は身振りの表出である
		70	指導	40,0	0/6	2/6	6/6	0/1	0/1	1/1	0	0	特別支援教育コーディネーターは校長が指名する
	小計	6問		49,5%	26/34 (76%)	17/34 (50%)	31/34 (91,1%)	7/8 (87,5%)	3/8 (37,5%)	7/8 (87,5%)	5	3	
4群	各問題	165	総論	34,3	5/5	3/5	5/5	2/2	2/2	2/2	3 (07-130 11-066 13-071)	0 (3 作成 実施 せず)	PVLは視覚認知障害の原因となる 症状は2歳までに発現
		168	評価	25,7	4/5	0/5	4/5	0/1	0/1	0/1	0	0	表記は音韻意識とは関連しない
		170	評価	25,7	1/5	0/5	1/5	0/1	0/1	0/1	0	0	STRAW-Rに単語の逆唱の項目はない
	小計	3問		28,5%	10/15 (66,6%)	3/15 (20%)	10/15 (66,6%)	2/4 (50%)	2/4 (50%)	2/4 (50%)	3	0	

(筆者作成)

表3 4群比較表

群	問題数	正答率	キーセンテンス記載率			正誤にかかわるキーセンテンス記載率				
			資料集	STテキスト	言語発達 障害学教科書	資料集	ST テキスト	言語発達 障害学教科書	過去 問題	作成 問題
第1群	6問	85%以上	23/37 (62%)	14/37 (37%)	23/37 (62%)	4/6 (66%)	3/6 (50%)	3/6 (50%)	4	2
第2群	5問	60%以上 75%未満	21/28 (75%)	5/28 (17.8%)	19/28 (67.9%)	3/5 (60%)	1/5 (20%)	4/5 (80%)	4	0
第3群	6問	40%以上 55%未満	26/34 (76%)	17/34 (50%)	31/34 (91,1%)	7/8 (87,5%)	3/8 (37,5%)	7/8 (87,5%)	5	3
第4群	3問	35%未満	10/15 (66,6%)	3/15 (20%)	10/15 (66,6%)	2/4 (50%)	2/4 (50%)	2/4 (50%)	3	0
合計	20問	全平均正答率 60%	80/114 (70.2%)	39/114 (34.6%)	76/114 (66.7%)	16/23 (69,6%)	9/23 (39.2%)	16/23 (69.5%)	16	5

(筆者作成)

と考えられる。

資料集のキーセンテンスの記載率について考察する。資料集には、20問すべてのキーセンテンス126のうち、89が記載されており、記載率は70%である。STテキストの34、9%よりは高いが、教科書の69,8%とほぼ同じである。

6割の正答で合格となる試験の資料として、記載率70%は低いとは言えない。しかし、重ねての記述になるが、記載されていても正答できていないのが実態である。

STテキストのキーセンテンス記載率について考察する。STテキストの総合キーセンテンス記載率は33%と低い。STテキストは言語聴覚士国家試験のすべての出題範囲を419ページにまとめたコンパクトな教科書である。キーワードの記載はしているが、その定義や解説が省かれているものも多い。また、検査に関しては下位検査名称、結果にかかわる用語など、検査名称以外の用語記載が極端に省かれている。STテキストを使用するということは、定義や他の資料の情報を学生自身の手で追加していく作業が必要であると言える。

最後に言語発達障害学教科書の記載率について考察する。全体的に資料集相応以上の記載率で、特に第3群ではキーセンテンス91,1%、正誤にかかわるキーセンテンス87,5%と非常に高い値を示す。一方、領域としてはXI言語発達障害学とVI音声・言語学領域、大項目5言語発達学に限定される。教科書で小児領域を学ぶということは4冊の異なる教科書を広げて学ぶこととなる。さらに、言語発達障害学教科書は2021年3月に第3版が出版され、今後は2版と3版とを比較検討する作業も含まれてくる。

#### 4 第3群詳細分析

4つの群のうち、第3群がもっとも対策が必要な群であると考えられる。第4群は新出問題が2/3を占める。新しい問題が一定数出るとは予想されるものの、まったくの新問題に対策を費やすのは効率が良いとは言えない。第1群は正答率85%以上であり及第点と考えた。第2群の平均正答率は表2総合一覧表より、66,9%であることから及第点と考えた。第3群にとどまっている問題をせめて正答率60%台に上げる方策を考えたい。そのために、第3群を詳細に分析する。

2つの選択肢を選ぶ問題はすべて3群以下に所属する。正誤にかかわるキーセンテンスが複数になることで難易度が上がる可能性を確認するため、他の領域の複数回答問題を確認した。しかし、平均正答率は6割を超え、中には正答率100%のものもあった。複数の選択肢を選ぶという形態が正答率の低さに影響していることは無いと思われる。

表2総合一覧表によると、第3群には6つの問題がある。これら一つ一つを考察する。164番と171番は複数の選択肢を選ぶ問題である。同じ出題形式が他群にはないため、比較対象外とする。70番は資料集に記載がなかったが、言語発達障害学教科書には記載があった。資料集で学生には適切な学習内容を提供できていなかったこととなる。72番は国家試験初出キーワードの問題である。資料集には記載があり、補習でも触れており、出題は十分予想されていたが結果には結びつかなかった。

残るは167番と172番である。この2問には共通する特徴がある。167番は大項目2評価の問題、172番は大項目3指導に分類される。しかし、キーセンテンスは、異なる大項目に散在する。第23回国家試験の問題でキーセンテンスが異なる大項目にあるものは表4に示す4問である。4問中3問が正答率55%未満の第3群に属する。

表4 キーセンテンスが異なる大項目に存在する問題

番号	正答率	問題区分	キーセンテンス			
			総数	1総論	2評価	3指導
71	97,1	3指導	10	6	0	4
167	54,3	2評価	6	1	5	0
171	54,3	3指導	6	0	1	5
172	45,7	3指導	5	1	3	1

(筆者作成)

キーセンテンスが異なる大項目に存在する問題について、167番を取り上げる。表5は、167番の選択肢別解答結果である。\*の選択肢が正答であり、( )内の数字が割合を表す。正答率は54,3%である。これによると、正答を選ばなかった受験生は、「3. 遊戯聴力検査」か「5. 対人コミュニケーション行動観察フォーマット」のどちらかを選んでいる。「2. 新版K式発達検査2001」と「4. LCスケール」を選んだ受験生はならず、この二つの検査が言語発達を評価できるこ



とは浸透していたと思われる。

「特異的言語発達障害」とは、知的能力障害、自閉症スペクトラム障害、聴覚障害が認められないにも関わらず、言語発達が遅れる。聴力検査と対人コミュニケーションに関する評価は優先順位が高い。評価の問題であるが、言語発達障害の総論を意識して解くことが必要である。大項目の1 総論、2 評価、3 指導の枠にとらわれることなく、項目の垣根を越えて思考する柔軟さが求められる問題である。

表5 167問 選択肢別解答結果

23-167 特異的言語発達障害の診断に優先順位の低い検査はどれか。	選択肢別解答
1. フロスティック視知覚発達検査	*19 (54.3)
2. 新版 K 式発達検査 2001	0 (0.0)
3. 遊戯聴力検査	8 (22.9)
4. LC スケール	0 (0.0)
5. 対人コミュニケーション行動観察フォーマット	8 (22.9)

(筆者作成)

71 番、171 番、172 番は臨床像および検査結果から指導目標を導く問題であり、異なる大項目にキーセンテンスが散らばる。ただし、71 番の正解率は 97.1% であり、20 問中最高である。これは類似過去問でも、1 総論と 3 指導が混在しているため、過去問を解くことで、問題に対応できたものと考えられる。

異なる大項目をまたいでキーセンテンスが存在する問題とは、「障害の総論をとらえた上で評価を選ぶ」「評価結果から指導計画を考える」問題であり、実際の臨床場面を想定した問題であると考えられる。100 問を 2 時間 30 分で解くという、限られた時間の中で、このような自由な思考に効率よくたどり着くことが求められる。

## V 結果と考察

### 1 合格実績に対する貢献度

全 200 問の平均正答率は 62% である。また、小児関連領域のうち、今回対象としなかった 17 問の平均正答率は 72% である。表 3 の 4 群比較表によると、検証対象である XI 言語発達障害学領域の平均正答率は 60% であることから、専攻全体の国家試験対策においても、小児関連領域全般においても、XI 言語発達障害

学領域は十分な結果を出しておらず、国家試験対策が有効であったとはいえない。

### 2 資料集の有効性

資料集は国家試験の内容を 70% 網羅しており、164 ページの冊子としては最低限必要の情報を記載している。ただし、資料集に記載があるだけでは正答率上昇にはつながらない。また、言語発達障害学教科書に記載があるが、資料集では抜け落ちていた内容が 70 番として出題され、低い正答率に留まった。このことから、資料集の記載にはより一層の精励を要する。

十分な記述のある教科書については、複数の種類を使いこなす必要がある。さらに、2021 年春に標準言語発達障害学新版が出版された。第 24 回国家試験対策は同じ領域について新版、旧版双方の教科書情報を比較検討する必要が生じている。

学生にある程度情報を整理した状態で伝えるためには、複数の書籍情報を集約する資料集があったほうが良いと考える。

### 3 問題集の有効性

作成問題の実施数が少ないことにより、学生は目新しい問題を解く経験が不足している。72 番は初出キーワードであったが、資料集に記載はあり、補習でも触れている。しかし、初出のため過去問題が存在しない。これを補うことができるのは作成問題の実施であると考えられる。12 月まで過去問解答に時間を費やしてしまうために、作成問題に取り組む時間が取れない状態になっている。領域別過去問と並行して作成問題に着手するか、領域別過去問を解く時期を早めるかの対策が必要である。

作成問題をつくる上で、23 回国家試験結果第 3 群にある問題の改変問題を作成することは意義があると思われる。特に、「障害の総論をとらえた上で評価を選ぶ」「評価結果から指導計画を考える」といった内容の問題を作成したい。同様に、2019 年以前の過去問についても平均正答率が低いものについて傾向を分析し、問題を作成すると効果的であると考えられる。

### 4 合同勉強会の有効性

合同勉強会が合格に結びついたかは不明確である。しかし、人との交流が不足しがちなコロナ禍において、

他校との勉強会実を施したのは、良い刺激にはなっただと思われる。合同勉強会については、微修正を重ねて継続したい。複数回実施希望者がいたことから、やはり開始時期を前倒しして行いたい。

## VI 2021年の課題

### 1 資料集配布時期の前倒し

2021年度の4年生には、4月下旬に実施された第1回模擬試験終了時に資料集を配布した。昨年に比べて微小ではあるが、早いスタートを切ることができた。

また、今年度は3年生に資料集の一部を配布した。学習が終わっている範囲に限定し、全体の半量程度である。3年模試解説に使用しているが、それだけでなく、授業中に1、2年次の学習内容を確認する際にも使用している。

### 2 補習内容変更点

記入欄確認の時間を設けないこととする。正答を配信して学生に確認を促す。すでに8月に空欄記入済み資料集PDFを光華naviにて公開している。また、学生が受け身になってしまう傾向にある教員の解説の段階を省き、9月当初から領域別過去問題を資料集で調べながら解きすすむよう指導したいと考える。さらに、「異なる大項目にわたってキーセンテンスが存在する作成問題」を準備し、学生に提供することを課題として検討する。

## 引用参考文献

- 監修公益財団法人医療研修推進財団：言語聴覚士国家試験出題基準. 医歯薬出版, 2018
- 内山千鶴子：Ⅺ小児言語障害学. STテキスト第3版. 医歯薬出版, pp292-317, 2018
- 玉井ふみ, 深浦純一：標準言語聴覚障害学言語発達障害学第2版. 医学書院, 2018

